



王様
の
お気に入り



Streich

すこしむかしのお話です。

グリユーネベートルという小さな国を、少年王・リヒャルトが治めていました。

美しい金髪と整った顔立ち・温和な性格で明晰な頭脳を持ったリヒャルトは、国民の絶大な支持と、優秀で人徳者揃いの官僚に支えられ、平和に暮らしておりました。

そんなリヒャルトを守るように、いつも側に付き添う人物がいました。

背の高い赤毛の男です。その男は元々軍人で、品という言葉とは無縁の、無骨で女にだらしない性格でした。

何故そのような男が王の側に仕えているの

か、皆が謎に思っていました。深く追及することはありませんでした。

「ロート、おらぬのか！ ロート！」
朝八時。

廊下に少年特有の、良く通るソプラノボイスが響き渡った。

「ローート！」
リヒャルトが従者の名を連呼することで、城の朝は始まる。

「はっ、すみません……」
慌てた様子で、三十半ば程の大柄な男がリヒャルトの部屋に駆け込んで来た。

寝坊をしたのだろう、頬にはシーツの跡が

くつきりと残り、髭も剃っていない様子だった。

「ロート、今日も遅刻だ。」

「……はい……」

ボサボサの赤毛を両手で撫で付け、ほどけた靴の紐を結び直すと、ロートと呼ばれた男はリヒャルトに深々と頭を下げた。

「忘れ物は？」

リヒャルトはロートに、まるで子供を窘めるような口調で言う。

ロートはそう問われ、自分の乱れた全身を見直し、胸に手を当ててはっとする。

「……タイを忘れました。」

「そうか。取ってこい。」

「はい、すぐに。」

ロートは一礼し、部屋を飛び出した。

リヒャルトは深い溜め息を付くと椅子に腰掛け、コーヒーを飲みながらロートが来るのを待つ。

毎日がその繰り返しだった。

朝食を終えたリヒャルトは、欠伸をかみ殺すロートを相手に、スケジュールの確認をする。

「えー……と、今日はこれから財務大臣の報告で……、その後は予定ないですね。」

汚い文字が並ぶスケジュール手帳を読みながら、ロートは頭を掻く。

「予定なしか。」

「今んところは。」

「そうか……。」

領くと、リヒャルトは少し視線を逸らしな

がらロートに言った。

「ロート、……実は折り入って頼みがある

のだが。」

「はい、何でしょう。」

リヒャルトは素直な性格で、臣下に我儘を

言ったことなどは一度も無かった。

たまにされる頼みごとでもいつも可愛らしい

ものばかりだったので、ロートもごく普通に

返事を返す。

「今日の午後、時間はあるか。」

「ええ、まあ。」

午後六時までは、王に仕える契約になつて
いる。

「実は……教えてもらいたいことがある。」

「剣術ですか？」

剣術なら他に先生が……と言いかけたロー

トの言葉をリヒャルトは遮った。

「違う。」

「まさか勉強じゃありませんよね。」

「当たり前だろう……。」

リヒャルトはそう答えると俯いたまま、黙

りこんでしまった。

「？ ……リヒャルト様？」

心配そうに覗き込むロートに気付くと、リ

ヒャルトは顔を上げ、ロートの目を見て言っ

た。

「……まあいい。後で部屋に来てくれ。」

午後、ロートはリヒャルトの政務室を訪れた。

「リヒャルト様、」

「入れ。」

ロートが政務室に入ると、リヒャルトは立ったまま卓上の大きな地球儀を眺め、くるくると手で回していた。

「本当にあの、勉強とかは駄目ですよ。俺……つと、私はそちらはてんでサツパリで。」

「良い、人払いはある。楽にしろ。」

そう言われ、ロートはすすめられるまま椅子に腰掛けた。

リヒャルトは立ったままで何か考え込む様子を見せ、執務室の中を落ち着かない様子で歩き回っては、再び立ち止まり、腕を組み考え込んでいた。

「……………」

「……………」

そんな状態が三十分も続いた頃、ようやくリヒャルトはロートの前で立ち止まり、口を開いた。

「……………ロート、」

「はい？」

「その、……………何だ。いつもお前が……………よくやっていることなのだが。」

「はあ。」

リヒャルトの言葉は漠然としすぎていて、

ロートには何のことなのかさっぱり解らなかつた。

「先程も柱の影で、イレエネとしていたであらう。」

リヒャルトに若い女中の名前を出され、ロートは少し考え込んだ。

「……イレエネ……? ……」

昼の記憶を辿る。

イレエネは新入りの女中の中でも、飛びぬけて若く、グラマーな美女だ。

女好きのロートがそんな女性を放っておく訳は無く、暇を見つけてはアプローチをしていた。そして一ヶ月かけて口説き落とし、ようやく今日、昼食の後片付けをしていたイレエネとデートの約束を取り付けたのだった。

その約束代わりに、と、柱の影でロートはイレエネの唇を……。

「……すみません!」

不真面目な態度を咎められると思い、ロートは椅子から慌てて立ち上がると、リヒャルトに深々と頭を下げた。

そんなロートの様子を見て、リヒャルトは不可解だ、という表情をした。

「なぜ謝るのだ? 怒ってはいない。」

額に油汗を浮かべたロートが、頭を下げたままリヒャルトを見上げる。ロートを見下ろしながら、リヒャルトは言葉が続けた。

「あの口付けを、私にも教えて欲しいのだが。」

「……は?」

リヒヤルトの口から出た思いがけない言葉に、ロートは哑然とする。不恰好で不自然な姿勢のまま、石のように固まった。

「やってみると言っている。」

「あの……誰が誰にですか。」

先程とはまた違う種類の汗が、ロートの額を伝った。

「おまえが私にだ。」

迷っていた割に、リヒヤルトはさらりと言つてのける。

「！ ばっ……つばっば……バカなことを……」

あまりに唐突で、予想外の頼みだった。

上手く言葉も発せず、ロートは思わずその場へあたり込んでしまった。

「バカとは何だ。無礼な。」

膝を付いたロートを見下ろし、リヒヤルトは少し憤慨してみせる。

滝のように流れる汗をロートは手の甲で拭い、よろよろと立ち上がった。

「いや……、あの、すみません……それに……」

「それに？」

「リヒヤルト様も俺も男ですし」

「なぜいけない。」

そう返されてしまつては何も言えなかった。俗世間のことをろくに教えられず、与えられる書物も選ばれたものだけ。

大切に大切に無菌室で純粋培養された少年は、同性愛という言葉さえも知らないだろう。

ロートは女にはかなりだらしがなかったが、リヒャルトの前でそういう部分を晒さないように細心の注意を払っていた。

こっそり少しずつ、当たり障りの無い範囲で、そういうことも教えておけばよかった……と今更悔やんでも遅かったが。

「……えーとですね……」

とりあえず簡単に説明しようとしても、咄嗟に上手い言葉が出ない。

「おかしいではないか。説明出来ないものを、何故いけないと申すか？」

経験抱負なロートだったが、口ではリヒャルトに太刀打ち出来ない。

「まあそんなことはどうでも良い。やってみろ。」

「しかし」

「王の命令が聞けぬか。」

リヒャルトが命令、という言葉を使うことはめつたに無い。

「……はあ………。」

ロートは深い深いため息をつくとき、意を決してリヒャルトの前に立った。

「……失礼します。」

一礼し、リヒャルトの小さな顔に近づく。

「……………」

「……………」

吸い込まれそうなほど深い緑の瞳が、ロートを見据えていた。

「……あの、目を閉じていただけませんか。」

「目を閉じるものなのか。わかった。」

頷き、リヒャルトは目を閉じた。

少女のようにあどけなく美しい表情に、ロートはいたたまれない気持ちで一杯になる。

「……………」

ロートも目を閉じ、柔らかい唇に軽く口付けた。

「…………失礼しました。」

素早く離れ、ロートは一步下がり頭を下げる。

おそろおそろ顔を上げると、ゆっくり目を開いたリヒャルトの頬が、みるみるうちに紅潮していくのがわかった。

「…………違うだろう！ こんなことは母上と

の挨拶でいつもしておるぞ！ イレーネとしていたようにやってみせろ！」

耳まで赤くして激怒するリヒャルトの前で、ロートは身を縮ませて泣きそうになった。

「もう勘弁して下さい……………」

「ならぬ。」

「……………うう……………」

半泣きで動こうとしないロートに、リヒャルトのとどめの一言が突き刺さる。

「…………減俸。」

「！」

恐ろしい言葉だった。

初めて使われたその単語に、ロートは言葉を失う。

「早くいたせ。待たされるのは好かん。」

当の王は、自らの発した言葉の攻撃力を知
つてか知らぬか、目を閉じたまま立っている。

……こんな王に育てた筈では無かった。

ロートはそう思いながら滲んだ涙をそっと
拭った。

「……………うう。」

目を閉じて待つリヒャルトの前に、やつと
の思いでロートは進み出た。

あどけない寝顔のような顔を、しみじみと
眺める。

療養中の王妃から受け継いだ、絹のような
金髪。整った顔立ちを飾る、長い睫毛と薔薇
色の唇。

……少女に見えなくもないではないか。

しかし、やはりここにいるのは、六年間仕

えている王・リヒャルト。

本当に大病も患わず、よくぞここまで大き
くなられた……。

「ロート！」

名を呼ばれ我に返ると、そこには再び『滅
棒』と言い出しかねないリヒャルトの目があ
った。

「は、はい。」

「め・い・れ・い・だ。もう二度とは言わ
ぬぞ。」

ロートは腹を決めた。

再び目を閉じたリヒャルトの顎に、そつと
左手を添え、持ち上げると唇を重ねた。

「……………」

軽く閉じられた唇を舌で開き、小さな歯を

撫でる。

リヒャルトは少し驚いた様子で目を開いたが、応えるように少しだけ口をあけ、再び目を閉じた。

「……………」

リヒャルトの舌先にロートが少しだけ触れる。

微かにダージリンティーの香りがした。

「……………おわりです。」

ロートは唇を離し、一歩下がった。

シャツが冷たい汗で濡れ、べったりと背中に張り付いている。

一刻も早く政務室から出て行きたいと思い、ロートは下を向きながら、少しずつドアの方へ移動していた。

リヒャルトは目を開けると、少し潤んだ瞳をロートに向け、呟いた。

「……………成程。……………これはなかなか凄いな……
…、ドキドキするぞ。何だか妙な気持ちだ。」

「……………ううう。」

そんなリヒャルトの姿も、台詞も、ロートにとつては物凄く辛かった。

例えるならば、娘を持つ父親のような、そんな心境だった。

「よし、やりかたは分かった。」

リヒャルトはそう言うのと、逃げ出しかけていたロートにつかつかと歩み寄り、腕を掴む。

「はいー？」

訳の分からぬままロートは手を引かれ、絨毯の上に転ぶように押し倒された。